

“のど・はな・みみ” の内科学

『medicina』誌は1964年創刊とのことであり、長い歴史をもつ内科臨床雑誌の草分けである。最近では便利なもので、電子ジャーナルで昔の論文も比較的容易に参照することができるが、その創刊号に「患者の声」として、娘が4歳時に発症した症状が、「側頸瘻」の診断に至り、手術で完治するまで14年を要したという主婦の寄稿が掲載されている。解決に至るまでの紆余曲折を振り返り、「最初にかかった医師が適切な専門医に紹介状を書いてくれていたら、14年の空費はなかったのでは」と嘆きつつ、「患者をすぐ最適な医師へ送るルートを制度化してほしい」と結ばれている。

現在においても、日々の診療で、内科医は常にこのような問題に直面している。どこにかかればよいのかよくわからないような問題は、まず内科で相談される、といったことは読者のみなさんも日々経験することだろう。内科はその診療の性格上、幅広い問題を扱うことが求められる。真摯にそのニーズに向き合うためには、自分の専門領域の疾患の診断・治療にとどまらない、他の診療科も含めた広範囲な生涯学習を行わなければならない。

同じく創刊号には、故・日野原重明先生が、「内科医のあり方の反省と正しく診断することの意味」と題する論文を寄せ、「内科は内科内の専門科の統合をはかるにとどまらず、眼科、耳鼻科、皮膚科、外科などの他科をまとめ上げる、いわば医学の統合の世話役」としての役割を担うべきと主張されているが、まさにそのような内科医の役割を指摘されたものであろう。

創刊当初の『medicina』誌を紐解くと、「高血圧」「胆嚢症」「肺線維症」などと並び、「接触性皮膚炎」、「頭部外傷の見分け方」など他科領域を主題とする論文も見受けられ、また「他科との話しあい」と題する連載があり、内科以外の領域の医師との対談が毎号掲載されている。今日の『medicina』誌の特集の主題をみても、皮膚科、精神科、整形外科など他科専門領域と関連したテーマが定期的にとりあげられており、本誌が創刊当初より綿々と“医学の統合の世話役”としての内科医の生涯教育をめざしてきたことが窺われる。

本特集では、こうした本誌の伝統に則り、『“のど・はな・みみ”の内科学』と題して、内科医が必要とする耳鼻咽喉科領域の知識・スキルの整理を試みた。本特集でとり上げたテーマは、内科医が日常診療において相談されることの多いものではないかと思われ、明日から役立つ内容となったのではないかと考えている。

もちろん、今日の進歩した専門診療のなかで、専門外の領域に徒に踏み込むことは、かえって無責任ではないか、という考え方もあるだろう。しかしながら内科医に相談を求める患者の多くは、その問題が、専門医を受診すべきような問題なのかどうかの判断や、受診する必要があるなら、いつ、どこに受診するのがよいかをアドバイスしてほしい、といったことを求めて相談するのであって、内科医に完璧なマネジメントを期待しているわけではない。高度な知識やスキルを身につけなくとも、上手に相談に乗り、適切な初期判断ができれば、日本ではプライマリ・ケアを実践する耳鼻咽喉科医も多く、適切な連携・協働によって質の高いケアを提供しうるのではないかと考えられる。

本特集ではそのような観点から、耳鼻咽喉科医のようなマネジメントができることではなく、患者の訴えにまず向き合い、上手に相談に乗り、診療をガイドするためにはどのような知識・スキルが必要なのか、といった基本的な考え方を示すことを目標とした。

本特集が全人的医療をめざす『medicina』創刊以来の意図に沿い、冒頭の主婦のような願いに少しでも応える一助となることを願っている。

石丸 裕康 (天理よろづ相談所病院総合診療教育部／救急診療部)